

個性が内包するもの

水野雄司

問題の所在

現行の教育基本法には、「個人の価値」を尊重し、「自主及び自律の精神を養う」ことが「教育の目標」として掲げられている。この方針に則り、学校現場では、「個性を生かす教育の充実」（学習指導要領 教育課程編成の一般方針）が行われている。

この「個性を生かす教育」は、国語・数学・理科・社会といったすべての教科、ならびに学校生活全般において行われるが、個性そのものを伸ばすことは、主に道德の授業で扱うこととされている。実際に、「特別の教科 道德」の学習指導要領には、「個性の伸長」という項目があり、そこでは次のように書かれている。

（小学校） 個性の伸長

〔第1学年及び第2学年〕 自分の特徴に気付くこと。

〔第3学年及び第4学年〕 自分の特徴に気付く、長所を伸ばすこと。

〔第5学年及び第6学年〕 自分の特徴を知って、短所を改め長所を伸ばすこと。

（中学校） 向上心、個性の伸長

自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること。

この項目について文部科学省は、「個性」とは「他者と取り換えることのできない一人一人の人間がもつ独自性」と定義し、個性を生かし伸ばしていくことは、小中学校に止まらない、「生涯をかけての課題」という解説⁽¹⁾をしている。このような個性を伸ばし、生かす教育を推進することについて反対する人はほとんどいないだろう。自分らしく生きることこそが、今最も求められている生き方だからである。

しかし、少し違和感がある。

公立学校における教育の主目的とは、卒業した後、社会生活を適切に行い、社会に貢献できる人材を育てることではないだろうか。そうすると、その学習内容の基本は、多くの人と共有できる社会的常識や普遍的知識を身に着けることになる。これは個性とは正反対のような印象を受ける。

実際にこのことは、かなり昔から議論になっており、たとえば、明治時代の末に、教育学者である吉田熊次（一八七四～一九六四）は、次のように記している。

教育上個性を重ずべしとの説は輓近^{ばんきん}〔最近^{さいきん}〕大に勢力を得て、個性を口にせざる教育家なき有様となれり。然れども個性は果たして絶対に教育上顧慮^{こりよ}せざるべからざるか。否、或程度までは個性を矯正^{きようせい}することこ

そ真に教育の任務となすべきにはあらざるか。⁽²⁾

当時すでに個性を重視することが教育上の主流となっており、その状況に対しての苦言である。個性の「矯正」こそが、教育のなすべきことと説いている。

また昭和四二（一九六七）年、心理学者の津留^{つるひろし}宏は、今の教育界には一見正反対にも見える二つの原理が存在しているとする。

それは個性化の原理と社会化の原理とである。前者は、個性の尊重を第一とし、教育はこの個性を伸長させることにあると考える。後者は、社会の発展進歩を主に考え、教育は個人をこの社会に適応させるべき――すなわち社会化の過程であると定義する。⁽³⁾

「個性化」＝個人の特徴を伸ばす教育と、「社会化」＝個人を社会に適応させる教育の二つがあり、相反するかに見えるこれらの要素が、今の教育には混在していると指摘する。

こうした問題意識をふまえて、本稿では、現在の道徳教育で重視される「個性」について、とくにこの言葉の成立過程に注目することで考えていきたい。この言葉が生まれた経緯と、その社会状況を見ることが、「個性」の本質を明らかにすることが目的である。